

蚊にさされる？ かまれる？——言語表現の恣意性と動機づけ

スイスの言語学者F・ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) は近代言語学の祖と呼ばれ、その講義録 *Cours de linguistique générale* (『一般言語学講義』) (1916) は構造主義 (structuralism) の原点と言われています。ソシュールの提唱した言語記号の<恣意性 (arbitrariness)> の概念は近代言語学の最も基本的な概念であるとされていますが、<恣意性> とは、最もわかりやすいレベルで言えば、言語記号の表現 (<記号表現> (=記号の形)) と内容 (<記号内容> (=記号の意味)) との間には必然的な／直接の結びつきがなく、両者の結びつきは言語の<慣習／約束事 (convention)> として取り決められているものであるということです。たとえば日本語の「リンゴ」と英語の 'apple' という記号は<記号表現> は異なりますが<記号内容> は同一 (=バラ科の果樹の一種) であり、それぞれにおいて<記号表現> と<記号内容> との間には必然的な／直接の関係は存在せず、日本語・英語という個々の言語の中の<慣習／約束事> として両者の関係が取り決められ、各々の言語の使用者は (当たり前のこととして) それを受け入れているわけです。そのように見ていけば、日本語や英語などの個別言語の語は、少数の例外——いわゆる擬音語・擬声語 (onomatopoeia) の類のもの (例: チクタク / ticktack, コケコッコー / cock-a-doodle-doo) ——を除いて、原則的に恣意的な記号であるということになります (ただし、後に述べるようにこれらも実は恣意的な記号の性格も持っています)。

このようなレベルでの言語記号の<恣意性> はほとんど自明とも言えるものかもしれませんが、ソシュール研究の第一人者である丸山圭三郎氏によると、<恣意性> という概念によってソシュールが第一義的に意図していたものは、言語記号の表現 (=形) と内容 (=意味) の間に直接的な動機づけとなるものが存在しないということよりも、言語記号によって言語外の現実世界が分割 (divide) ・分節 (articulate) される仕方があらかじめ必然的に決まっているわけではないということであったとのことです (cf. 丸山 1981; 丸山 1983; Nishimura 1987)。このような言語観は、現実世界にあらかじめ存在するモノに対して言語記号は単に名称／呼称を与えるだけであるという、「目録 (nomenclature) としての言語」という見方と大きく対立するものであると言えます。すなわち、ソシュールによると、現実世界は本来唯一的な固有の構造を持たず、それは個々の言語によってさまざまな形で組織 (organize) され、構造化されるということです。このような言語による構造化は、日常語の表現において各言語および (同一言語の中の) 各方言の間の相違が顕著に現れます。たとえば、もし犬が人の手をかんだとしたら「犬にかまれた」と言いますが、「蚊」の場合はどうか。「蚊は『さす』に決まっているだろう」と言うかもしれませんが、西日本の一部などでは、「蚊にかまれる」と表現することがあります。しかしその場合でも、「蜂」の場合は「かむ」とは言わず、「さす」と言うのが普通です。ちなみに英語では、「蚊 (mosquitoes)」は「かむ (bite)」と言うのが一般的です。また、ご飯をお茶碗に盛ることを東京など東日本では「ご飯をよそう [よそる]」と言うのが一般的ですが、近畿よりも西では「ご飯をつぐ」という言い方をよくするようです。もちろん、「つぐ」は対象が液体の場合は普通に用いられます。これらをまとめると次のようになります：

	犬が	蚊が	蜂が
共通語	かむ	さす	
西日本の一部	かむ		さす

	ご飯を	お茶を
東京など東日本	よそう	つぐ
近畿よりも西	つぐ	

日本語の方言間における言語的構造化——カテゴリー化 (categorization) とも呼ばれます——の違いの例を見ましたが、日本語と英語の間でもこのような違いはいくらでもあります。たとえば日本語では、「人間・動物」は「死ぬ」、「植物」は「枯れる」と言いますが、英語にはこの区別はなく、ともに 'die' で表します。逆に、日本語では「コーヒー」も「スープ」も「薬」もすべて「飲む」ですが、英語では 'drink', 'eat', 'take' といった違った動詞が用いられます ('eat soup', 'take medicine' のように同じ組み合わせで頻繁に用いられる表現は一般に連語 (collocations) と呼ばれます。連語は広義のイディオム (idioms) (=その言語の慣用 (語法)) の一部であると言えます)。

言語記号の<恣意性> の帰結として、各々の言語／方言体系による現実世界の構造化／カテゴリー化の多様性が生じうるわけですが、興味深いことに、その各々の言語／方言の話し手にとっては、恣意的な構造化／カテゴリー化の産物であるその言語表現は、実際は恣意的なものというよりも自然 (natural) なものとして捉えられ、ときには必然性 (necessity) を持ったものとして意識されることさえあります。すなわち、「蚊にかまれる」とか「ご飯をつぐ」という言い方は、中央で行なわれている表現とは異なるものであっても、その言い方を常用する人にとってはきわめて自然なものであり、それ以外の言い方はないのではないかと思ったりするわけです。そして、もしそのような言い方をする理由を問われたとしたら、(その人なりに) 妥当な説明をしてくれることもあります (たとえば、なぜ「蚊にかまれる」と言うかと言えば、蚊は蜂と違って血を吸うからだ、とか)。このように、ある言語表現の<恣意性> の背後には、実はその表現の<動機づけ (motivation)> と言えるものが存在しており、両者は表裏一体を成してその表現を特徴づけているのです。'There is (far) more to the nature of language than arbitrariness' ということです。